

印象記

森鷗外

中村武羅夫

印象記

森

鷗

外

一

「中央公論」の滝田哲太郎君は、雑誌編集者として、よく森鷗外を訪問したらしい。十四五年ばかり前の「中央公論」には、一頻り鷗外の作品が発表された。人からまた聞きに聞いたことだから、嘘か本当か知らないが、こんな話しがある。それは滝田君が輜重輸卒か何かで入営してる時、強情で負けずきらいの滝田君は、素直に軍隊の規律に服従しないので、ひどく上官のにくしみを買って、苦しい労役ばかり強いられた。ところが或る時、た

またま、話しが滝田君が森鷗外を知っているということに及んだ。鷗外は、当時、陸軍軍医総監だった。連隊長は大いにおどろいて、「お前、森林太郎閣下を本当に知ってるのか。」と念を押したので、滝田君は持ち前の熱弁で、森閣下と親友だというようなことを述べ立てた。

「じゃ、君からそういって、一つ森閣下の書をもらってくれ。」「そんなことは何でもない。僕からそういってやれば、すぐ書いてくれる。」というようなわけで、滝田君は、皆なの見ている前で、鷗外に端書を一本書いた。ところが、早速鷗外から書が届いたので、それ以来急に

滝田君に対する軍隊の態度が変り、毎日あそんで、甘いものばかり食って来たというのである。

これは嘘か本当か知らない。また、滝田君のことだから、皆なの前ではえらそうな端書一本飛ばして置いて、かげで大いに懇願の手紙を出したのかも知れない。が、どっちにしても、この話しは、私に、鷗外に対する一脈の人間的な懐しみをいだかせる。

私が、鷗外を知ったのは、まず晩年に近いころと言ってよかろう。歴史物を書き出す前、「スバル」に「杵々・セクスアリス」を書いたり、新潮社から「涓滴」とい

う創作集を出版したりして、文壇的に、若がえっていた時分のことであつた。勿論、五十をとづくに過ぎた年配だつたらうと思うが、小柄な、額の広い、カイゼル髭の黒々とした、顔の色沢なんか艶々として、まだ、若々しい印象を与える、元気にみちた人物だつた。おなじころ坪内逍遙氏にも会つたのであるが、多分、そんなに変りのない年配だらうと思うが、逍遙氏の方は鷗外とくらべものにならないほど、年寄り染みて見えた。その若々しい鷗外の方が早死にをして、一見、老衰して見える逍遙氏の方が健在なんだから、人間の寿命など、健康や精力

と比例しては、あまり当てにならない気がする。

私は、鷗外に、そんなに度々会ってはいないが、五六度は会ってる。最初会ったのは、多分三月時分だったろうと思う。案内をよく知らないので、道順に依じて裏門から入り、内玄関から案内を乞うた。（千駄木の屋敷は、ちようど角屋敷になって、裏門と表門とは、正反対になっている。本郷通りをずっと奥に行って、右に曲って行く）と団子坂の降り口で、そこに裏門があった。）すると、ちよこちよこと出て来たのは、鷗外自身で、銘仙の地味な、黄色い格子の袴を二枚重ねて、羽織は着ずにきちん

と袴を穿いていたので、私はおどろいてしまった。訪問した方の私は羽織も着ず、袴の着流しだったので、私は、自宅に居てもちやんと袴をはいている鷗外氏に恐縮してしまつたのである。

すぐ、書齋に通されたが、ちよつと寄りつき難い、ひややかな感じを与えた。当時の文壇や、文学雑誌を、白眼に見ているような語気が、その口吻にちよいちよいもらされるのであった。「新潮」に出たことのある、自分に対するどんな小さな悪口でも、ひやかしでも、一々記憶してるのには、ちよつと面食らつてしまった。

「あれは君の責任じゃあるまいが、新潮には、ぼくに
いてこんなことを書いたことがある。」と十年も前のこ
とを並べるのであった。

二

「新潮」が、長い間、どんなに鷗外に対して、悪口をい
ったり、ひやかしたりして来たか、鷗外は、それを一つ
一つ私に向かって並べ立て、大いに怪しからんというの
である。だが、それを並べ立ててしまったら、それで気
が済んだと見えて、初めて口元に、可愛らしい微笑を少

しばかり浮かべて、私が提出する問題について、ちよつとの間考えていた後、やがて自分の前に紙を伸べ、鉛筆を執るのであった。——私は、やっぱり鷗外に談話を求めるために、訪問したのであった。

八畳の下座敷で、床の間や違い棚があり、絨毯が敷いてあった。縁側に向かつて、紫檀の机が置いてあった。が、鷗外は机には向わないで、私に差し向かいになったまま、敷物の上に紙をひろげ、上半身を少しこごめ気味にして、鉛筆でさらさらと書いて行くのであった。それは鷗外常用の原稿紙らしかったが、普通の原稿紙ではな

く、罫のないコットン・ペエパアを半紙版に截ったものであった。鷗外は最初に、まず森鷗外氏の談話と自ら署して、私の前で——私をきちんとすわらして置いて、鉛筆でさらさらと書いて行くのであった。鉛筆は甘本ばかりも丁寧にけずって、かたわらの四角な塗り盆の中にそろえたあった。その盆の中には、ナイフだの、サックには入った小さな西洋鋏だの、錐だの、紙漉だの、そんな風な机辺のこまこましました必要品が、きちんと揃えてあった。

私は、そんな風にして、鷗外から「森鷗外氏の談話」

を、二三度得たことがある。鷗外のその筆跡は、今でも探して見れば、確かどこかに保存してあると思うが、「鷗外全集」の第三卷には、それが談話として載っているけれども、実は談話でも何でもなく、鷗外自身で「森鷗外氏の談話」を書いてくれた、原稿なのである。

そんな事が動機になって、新潮社との間が急に打ちつけて来た。その当時、小説も一つ二つは「新潮」に書いてもらったし、私が知ってから殆ど二十年近くになるのだが、その間に殆ど文学者を訪問したことがないといってもよいほど出不精な、社主の佐藤義亮氏が、それが機

会で、鷗外を二三度も訪問して、創作集の「涓滴」など出版するようになったのだ。何か、まだ、鷗外のもので大きな出版をやる計画のように聞いていたが、一徹で負けず嫌いな気性の佐藤氏と、神経質で、やっぱり一徹な鷗外との間に、何か行きちがいがあった、それはそのまま立ち消えになってしまった。終いには、訴訟沙汰にするとまで、その行きちがいがいじめられて行ったようだが、しかし、結局、鷗外の思いちがいがいだったことが明瞭になって、それで解決した。問題はそれで解決したが、しかし新潮社と鷗外との感情は、以前のように打ち解け

る機会もなく、鷗外は亡くなつてしまつた。

人によると、鷗外のことを、ひどく悪くいう人がある。

内田魯庵氏などは弁護している方だが、しかし、私の耳にする範囲では、鷗外をよくいうよりも悪くいう人が多い。鷗外の学殖や、精力には感服しても、人物に対しては感服しない人が多い。つまり人を惹きつける徳のなかつた人なのだろう。親分的気分なんかちつともなくて、神経質で、傲岸で、余りに潔癖過ぎたのだろう。その点、尾崎紅葉や、夏目漱石や、坪内逍遙氏などは、何といつても大勢の弟子を持っている。度量が広く、いろんな人

物を容れて行くことが出来たのだ。そこへ行くと森鷗外や幸田露伴氏など、明々察々の人は、あまりに人の欠点なんかが見えすいて、馬鹿々々しくて人を容れて行くことが出来ないのだろう。鷗外でも露伴でも、自分のして行くだけのことは、さっさとして行くが、その一方に、弟子を仕立てるといふような側の人ではないと見える。あれだけの大きな人物で、その割に腹心の弟子というよ
うなものを、二人とも別に持たないではないか。

日本文学電子図書館

文壇隨筆

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮社

大正14年11月10日 印刷

大正14年11月15日 発行

日本文学電子図書館